



公益社団法人 相模原青年会議所 創立60周年記念誌

理事長挨拶



公益社団法人 相模原青年会議所

第60代理事長 **八木 貴弘**

「新日本の再建は青年の仕事である」1949年、東京で始まった青年会議所運動は全国へ広がり、この相模原の地にも届きました。設立にあたっては、相模原ロータリークラブの全面的なご支援と、スポンサーを引き受けていただいた、第15代理事長 齊藤文夫先輩をはじめとする川崎青年会議所の皆様のご尽力を賜りました。そして1965年に創立総会、翌年4月2日に初代理事長 矢島治先輩のもと35名の創立メンバーが集まり相模原青年会議所が発足しました。

今日に至るまで、本当に多くの繋がりを市民、行政、地域企業・団体の皆様とともに育ませていただきました。中でも、第9代理事長の川合貞義先輩の時に始まった相模原市民桜まつりは、今でも相模原青年会議所を代表する事業です。当会議所の運動にご理解ご協力をいただいた全ての皆様へ、そして、想いを繋ぎ、心を燃やして運動を紡いでこられました全ての先輩諸兄姉の皆様へ、改めて深い感謝を申し上げます。

2025年、60周年となる本年は、創立から今日までの輝きを結び付けて、これからの地域そして組織の夢を描く運動を展開して参りました。それは、「誰もが夢を描き挑戦できるまち」、「人が集い交流するまち」づくりです。そして、自らの成長と出会いを望む青年に開かれ、かけがえのない仲間をつくり、人生を豊かにできる組織づくりです。記念講演・記念式典・記念事業を通じ、皆様へ、「大切な人やこのまちを想い、一歩踏み出し続ける勇気」を届けることができましたら幸甚です。

これまでの多くの出会い、繋がりへの深い感謝と、想いを繋ぐこととお誓い申し上げ、理事長の挨拶に代えさせていただきます。誠に有難うございました。

実行委員長挨拶



公益社団法人 相模原青年会議所

副理事長兼
60周年実行委員長 **廣田 静香**

この度、創立60周年という節目を迎えることができました。これもひとえに、現役メンバーを気にかけて、ご支援くださっている先輩諸兄姉の皆様、地域の皆様にお力添えいただいた賜物です。

60周年記念事業には二つの目的がありました。一つは、これまで地域を築いてこられた先輩方や地域の皆様に感謝を伝えること。もう一つは、一人でも多くの方に「未来を創るのは自分たちだ」と感じていただくことでした。準備を重ねる中で、メンバー一人ひとりの意識と行動が変化していくのを感じ、事業を通じてその想いが多くの方に届いたと確信しております。

記念講演では、まちづくりには協働が欠かせないことが語られ、私たちが今後の10年に向けて掲げるスローガン「人が集う 共創都市 さがみはら」に確たる自信をもつことができました。記念式典では、歴代理事長の皆様が壇上に立たれた瞬間、60年の重みと受け継がれてきた想いを強く感じました。その光景はまさにこの組織の誇りであり、未来を託された私たちの使命を改めて胸に刻むものでした。そして「未来デザイン～さがみはら万博～」では、企業や地域団体、大学生と協働し、相模原の魅力や可能性を発信しました。多彩なステージや共生社会体験ブース、最新技術や地元飲食の魅力など、相模原の未来を彩る輝きを集めた私たちの挑戦が、来場した皆様の笑顔や勇気につながったと感じています。

この二日間を通じて、60周年が単なる通過点ではなく、未来への架け橋であることを実感しました。共に歩んでくださったすべての皆様に、そしてともに創り上げてきた仲間たちに、心より感謝申し上げます。

60周年記念事業までの道のり

60周年記念事業の構築にあたり、まず向き合ったのは「なぜこの事業を行うのか」という問いだった。単に“60周年だから”では意味を成さない。事業とは、その必要性を調べ、考え、分析し、今をどう変えるべきか、そして在るべき未来の姿を描いたうえで形にするものだ。周年事業であっても——いや、周年事業だからこそ一片の妥協も許されなかった。

本事業は、「過去を紐解き、今を見つめ、未来を描き、人・まち・社会の課題を自分ごととして捉え、前向きに行動する人を増やすこと」を目指した。60年の過去を辿れば、歴史の重みと先人への深い感謝があふれ出す。今を見つめれば、受け継ぎ未来へ渡す責務の大きさに身が引き締まる。そして未来を思えば、「誰もが夢を描き、勇気をもって挑戦できるまち」の姿が鮮やかに浮かび上がった。

この想いをどう事業として表現するか。前年から重ねた会議は100回をゆうに超えた。明け方までJCルームの灯りが消えず議論した夜もあり、出口が見えず立ち止まった瞬間もあった。それでも歩みを止めず仲間と前へ進み続けた。臍げだった輪郭が確かな形を持ち始めた頃、季節はすでに桜の頃となっていた。

準備が本格化すると、新たな壁が次々と立ちはだかった。「記念講演・式典・祝賀会」では、会場配置、演出、動線、受付体制、安全管理、司会原稿など、挙げればきりががないほどの調整が必要となった。何度も重ねたりハーサルは、ご来場の皆様に満足いただき、60年への感謝と次代への期待に応えるためのものだった。

「未来デザインさがみはら万博」では、来場者の心を動かす内容であることに加え、老若男女すべてが楽しめる構成、安全対策、環境配慮など、多くの条件を満たす必要があった。地域に確かなインパクトを届けるため、広報も徹底した。Web・SNSだけでなく、市内全域へのチラシ配布、ポスター掲出、自治会・商店街・行政との連携など、泥臭いほど地道な取り組みを積み重ねた。ステージ出演者やブース出展者には事業の目的を丁寧に伝え、同じ方向を向いて力を発揮していただけるよう関係性を築いた。当日は約12,000人が来場し、会場は熱気に包まれた。メンバーそれぞれが持ち場で全力を尽くし、1年間積み上げた準備はこの濃密な2日間のために——そしてその先の未来へつなぐためにあったのだと誰もが実感した。

ここに載せた写真だけで、この道のりすべてを語り尽くすことはできない。裏表紙に敷き詰めた会議や準備の写真、一枚一枚に込められた時間と想いにも、ぜひ目を向けていただきたい。そこにこそ、この60周年記念事業を形づくった私たちの挑戦が息づいている。そして——この挑戦が、今日も誰かの背中をそっと押し、新たな一歩を生み出していることを願っている。



創立60周年記念講演

創立60周年を記念して開催された記念講演「ALL相模原の挑戦～未来へ紡ぐ第一歩～」には、多くの市民や関係者が集まった。司会を務めたのは、元日本テレビアナウンサー 脊山麻理子氏。柔らかな語り口と温かな笑顔で会場を和ませ、会の幕が開いた。パネルディスカッションでは、相模原市長 本村賢太郎氏、元宮崎県知事 東国原英夫氏、コミュニティデザイナー 山崎亮氏、そしてファシリテーターを務める八木貴弘理事長を加えた4名が登壇した。テーマは“つながりの先に生まれる挑戦”。行政、民間、コミュニティデザイン、そして相模原青年会議所。それぞれの視点から相模原の未来をどう築いていくかが語られた。本村市長は「市民と一緒に盛上げていくことが行政の使命。」と語り、行政と市民が共に描くまちづくりの理想を示した。東国原氏は「若い人たちがこれだけ挑戦をしている相模原は無限の可能性を秘めている。」と語り、挑戦を恐れない姿勢の重要性を強調した。山崎氏は「専門家に任せるのではなく、当事者として共に学び、共にすることが大切だ。」と呼びかけ、共創の価値を伝えた。

会場全体が世代や立場を超えてまちづくりについて考え、未来へ想いを馳せる空気に包まれた。明日を変えるための勇気ある一歩を応援したこの記念講演は、きっと今後も参加者の背中を優しく押し続けていることだろう。





創立60周年記念祝賀会

式典の厳かな雰囲気から一転、会場は華やかな祝賀会へと姿を変えた。

相模原青年会議所シニアクラブ 山際華代子会長の乾杯を皮切りに、賛助会員の紹介、衆議院議員 長友克洋氏、大塚小百合氏による祝辞が続いた。第11代理事長でありチャーター（創立）メンバーの中村宣勝先輩からは、創立当時を振り返りながら現役メンバーに託す想いが語られた。その後、姉妹JCである韓国・釜山海雲台青年会議所との記念品交換が執り行われ、40年を超える友情に新たな1ページを加えた。歓談の時間には、旧交を温める姿や、来訪JCと交流する姿が見られ、世代や地域を超えた絆が深まった。関係諸団体、シニアクラブ、来訪JCを含め約300名が集った祝賀会の最後には、現役メンバーが一列に並び、感謝の気持ちを込めた見送りをした。

これまでへの敬意と次代への希望を確かに結ぶ、節目にふさわしい祝賀の夜であった。



創立60周年記念式典

式典は理事長挨拶で幕を開けた。八木貴弘理事長は行政・関係諸団体、企業・市民団体、そして先輩諸兄姉への深い感謝を述べ、志と伝統を次代へとつなぐ決意を語った。長い歴史をもつが故に、もう会うことの叶わぬ先輩方もいらっしゃる。そうした先輩方への想いを述べる理事長の頬を、一筋の涙が伝う。それでも前を見つめ語りかけるその姿が、その覚悟が出席者の胸を打つ。

会場は熱い想いに包まれ、現役メンバーには60年の重みと、それを受け継ぐ喜びが広がった。次に、神奈川県平田良徳副知事、相模原市 本村賢太郎市長、相模原市議会 西家克己副議長、相模原商工会議所 杉岡芳樹会頭、相模原市自治会連合会 大木恵会長、公益社団法人日本青年会議所 外口真大会頭と大久保貴惟監事、関東地区神奈川ブロック協議会 大黒健司会長、そして姉妹JCである韓国・釜山海雲台青年会議所 ジョン・ジェグジョン会長より、温かい祝辞をいただいた。続いて登壇した32名の歴代理事長の姿は、まさに60年の歴史を象徴する圧巻の光景。その後スポンサーLOMである一般社団法人川崎青年会議所への感謝状贈呈、目録の拝受を経て、廣田60周年実行委員長が次の10年を見据えた「創立60年代LOM運動指針」を発表し、会場は未来への期待に満ちあふれた。

節目の式典は、60年の歩みを胸に、さらなる挑戦を誓う荘厳なひとときとなった。



創立60周年記念ロゴマークデザインコンセプト

このロゴマークには、60年の歩みと、これから紡ぐ未来への願いが込められている。テーマは“繋がり”と“輝き”。地域と共に歩み、手を取り合いながら、人々の輝きにあふれる相模原を表現した。数字の“60”を囲む手は、長い歴史の流れと、人と人との絆を象徴するように流線形で描かれている。そして中央の握手には、これまでの歩みとそれを支えてくださった全ての方々への感謝、そして未来に向けて共に進もうとする前向きな想いを込めた。また、手の色はJCカラーに加え、緑区・中央区・南区それぞれのテーマカラーを取り入れ、相模原全体が一つになり、新たな未来へ歩み出す姿を表した。さらに、下部にあしらわれた星は、市民一人ひとりの輝きをイメージした。

ロゴはピンバッジとしてメンバーや先輩諸兄姉の手に渡し、その胸元を輝かせた。節目の年に掲げられたこのロゴマークは、60年の絆と志を受け継ぎ、未来へと輝きをつなぐ象徴として、多くの想いを静かに語りかけている。

ステージイベント

オープニングを飾ったのは、キッズダンス。全力のステップと笑顔が、一気に会場を熱気で包んだ。その後のステージを支えたのは、相模原出身のお笑いコンビ「昨日のカレーを温めて」。夢に挑み続ける彼らの軽快なトークが、終始笑いと拍手を生んだ。DREAM FUTUREコンテストでは、若者たちが音楽で未来を描き、まっすぐな歌声で観る人に勇気を届けた。続くスペシャルゲスト、サスケの「青いベンチ」が流れると、会場は懐かしさと温かさに包まれた。夕方のエフエムさがみ「あるのあるがまま」公開収録では、大学生が本音で語る「Z世代のまちへの想い」に共感の拍手が広がった。そしてフィナーレ。DJ BKが熱いビートで観客を引き込み、新羅慎二氏(若旦那)が全身で放つ音楽とメッセージに会場が震えた。

挑戦する人々が輝き、挑戦する人々へエールが届く。その光景は、まさに“未来へ続く希望のステージ”だった。



トモイキラボ

「トモイキラボ」は、“ともに生きる社会”の実現をテーマにした体験型ブースとして設けられた。そこには、テクノロジーとスポーツという二つのアプローチから、共生の可能性を探る場が広がっていた。

一つは、最先端技術が生み出す“違いを超える体験”。靴に装着し、足裏の振動で進む方向を教えてくれるデバイスや、体の一部のように自在に操れる次世代モビリティを実際に体験できるコーナーだ。来場者はその滑らかな動きや精密な反応に驚き、“テクノロジーが人を自由にする”という未来を感じ取っていた。もう一つは、誰もが一緒に楽しめるスポーツ体験。ポッチャやモルックを通じて、年齢も体力も関係なく、誰もが笑顔でつながっていく。ボールを投げ合うたびに歓声が上がり、そこには“競う”よりも“ともに楽しむ”時間が流れていた。

最新技術と誰もが楽しめるスポーツ。そのどちらもが「共生社会」の形を確かに映し出していた。このブースを訪れた人々は、誰かとともに生きる未来の優しさを、少し先の未来から覗けたに違いない。



くだおれストリート

相模原の“うまい”が一堂に会し、食を通してまちの魅力を体感できる空間をつくり出した。会場には、香りも見た目も美味しそうなメニューが並び、多くの人が笑顔でお気に入りの一品を頬張っていた。出店したのは、市内で人気を集める20店舗。どの店も500円のワンコインメニューを用意し、多くの世代が楽しめるようにした。

どの店も腕を振るい、そして出来立ての香りに誘われて長い行列ができた。手にした一皿を囲んで笑顔があふれる光景があちこちで見られた。「くだおれストリート」は単なる飲食スペースではなく、“人と人、人とまち”をつなぐ出会いの場となった。地域の味を知り、店の人と語り、相模原の新しい魅力を見つける一。食を通して広がったその輪が、まちに賑わいと温もりをもたらした。



未来創造ブース

「未来創造ブース」は“未来の相模原”を体験できる空間として設けられた。最先端の技術と創造力が交わるこの場所には、次の時代を形づくるヒントが詰まっていた。

“JAXA×相模原市シティブロモーション戦略課”のコーナーでは、宇宙服を着て月面を背景に写真撮影できる特別体験を実施した。目を輝かせ、笑顔でポーズを決める子どもたちは、このまちの未来そのものだ。展示では最新のミッションも紹介され、“宇宙を身近に感じられるまち相模原”の魅力を伝えた。JR東海株式会社は「FUN+TECH LABO」の映像を通じて、リニア中央新幹線駅周辺の将来像を提示し、まちの可能性を示した。太陽光で動くゲームを提供したのは株式会社サンエー。“遊びながら学ぶ”体験を通じ、再生可能エネルギーの大切さを子どもたちに伝えた。株式会社Mimmyはオンラインとアートを融合させ、世界とつながるワークショップを展開。海外アニメクリエイターの映像を使ったクラフト体験に、子どもも大人も夢中になった。そして日産自動車株式会社は、災害時に電源として活用できる電気自動車を紹介。未来の暮らしを支える技術もう目の前にあることが来場者の心に残った。

それぞれの体験が描き出したのは、“人の想いで進化するまち”の姿だ。笑顔と学びに満ちたこのブースは、相模原の未来が既に動き始めていることを教えてくれた。





編集後記

1年間をかけて創り上げた2日間。ここに込めた思い出を含めて記念誌として描くこともまた、1つの挑戦でした。皆様に当日の熱気や、それに至る道のりをお届けできたと信じています。70周年記念誌を手にすることを楽しみに、この記念誌の幕を閉じることとします。最後に作成に携わった全ての方へ、そして共に歩んだメンバーへ、心からの感謝を申し上げます。